

■マルティナさん肉体改造～感度十倍実験

【え～～俗に 『女性の性的感度は男性の十倍』 などと言われることがあります……実際はどうでしょう。女性を上手く感じさせられない男性や、男性に上手く快感を与えてもらえない女性の悩みはつきません】

「ちょっと……！」

【感度が高いと言われているにも関わらず、性交時に感じないのはなぜか？ 情報が誤りだったのか？
いいえ、それは女性の性感のスイッチが入っていないだけなのです！】

「聞きなさいよ！ 何なのよこれはっ！？」

男が性感の男女差について語る中、女闘士マルティナが歯を剥いて訴える。

——今マルティナがいるのは、とある研究所。

ここで働く魔導師たちは性について日夜研究しているのだが、なかなか進展しておらず……というのも、女性魔導師がこの研究所にはいないからだ。

どうにか性の実験に協力してくれる女性はいないものか。悩んでいた時に通りがかったのがマルティナだった。

魔導師たちは性の研究であることを隠してマルティナに協力を依頼し、不意を突き睡眠薬で眠らせ……

そして天井から吊るした縄に縛り付け、脚も肩幅までしか開けないように枷を付け、現在に至るというわけである。

【我々は研究の結果、女性の性感は性交時にしばしばスイッチが入っていない状態になるのだと仮定しました。

では肉体を弄り、スイッチが入ったら本当に感度が十倍になるのか？ という実験を実際にやってみる、というわけでありまして】

「肉体を弄る、ですって？ あなたたち、私の身体に何を……！」

マルティナが眠っている間、彼らによって肉体を改造されたい。

彼らの発言等からして、マルティナの性感のスイッチとやらが常に入った状態にされているようだが……

本当にそんなことが可能かはともかく、こんな実験に付き合う道理はない。

腕と脚に闘気を込め、力尽くで拘束を解こうとするマルティナに、魔導師の一人が近付いた。

【では早速】

「?! 何を——」

ぱあんっ♥

「んおっ?!♥♥」

魔導師がマルティナの臀部——引き締まった筋肉の上に女性の丸みが実った爆尻に、平手を叩き付けた。

途端、マルティナは無様な喘ぎを上げた。叩かれた瞬間、尻から腰部、更に腹部と股間部にかけて、強い快感が奔ったのだ。

【ふむ。感度は良好なようですね】【感度良好、確認】

(なに、今の……？ まさか、本当に男の十倍、感じやすくなってるだけでも——)

全く信じていなかったが、叩かれただけで甘い感覚を与えられ、確信する。
自分の肉体は改造され、感度が通常の数倍以上に高められたのだと。

「あなたたち……こんなことして……！」

自分たちの研究のために、騙してまで自分を監禁し、更に改造を施し実験に至る魔導師たちの性根に恨みを上げるマルティナ。

しかし彼女の恨みなど魔導師たちは完全に無視。何の遠慮もなく、尻に続き胸……顔のように大きく柔肉のついた爆乳を、力任せに揉み込んだ。

「許さな」

ぎゅむうっ♥

「iiiiiiiiiiii♥♥」

【胸部の感度、良好です】【感度良好、確認】

いきなり指を胸に食い込ませる、あまりに乱暴な責め。とても愛撫とは呼べないそれにも感じてしまい、マルティナは再び嬌声を出してしまう。

魔導師たちの無機質な声との温度差が、自分は実験道具なのだと思い知らせてくれる。

【では続いて、マルティナさんが他の女性と比較してどのような感度なのか実験したいと思います】

「他の女性……？ まさか、他の人たちにも手を出してるの？！」

【こちらに比較サンプルとして、感度改造を施していない通常の女性を用意しております】

魔導師の合図で新たな女性が出てくる。……それは武闘会で見た女闘士、ビビアンとサイデリアであった。

「マルティナちゃん、ごめんなさい……助け出そうとしたんだけど……」

「しくじっちゃった……糞っ！ この縄を外しやがれっ！」

どうやら、連れ込まれて帰らないマルティナを取り戻すために行動してくれたようだ。

彼女たちもマルティナほどではないが、実力は相当のはずだが……やはり魔導師に卑劣な手を使われたのだろう。

同じように天井縄と足枷に身体を拘束されている。

このような卑劣かつ残忍なことをしておきながら、魔導師たちは淡々と自分たちの実験を進めていく。

【彼女らが一度イク前にマルティナさんが十回イケば、実際に感度十倍になったと証明できますので】

「じゅ、十回ですって？！ あ、ちょっと、待ちなさ——」

尻と胸を触った魔導師が、両手をワキワキと蠢かせて再びマルティナの身体に近付ける。

他の二人にも同様、それぞれ一人ずつの魔導師が手を伸ばし——

【では実験開始】

もみっ♥ ギゅむううっ♥

「あ♥ やめ……っ♥」

「アンタら……っ♥ こんなことして♥ っ♥」

「あっ♥♥ あ♥♥ おっ♥♥ んおっ♥」

【早くも感度の違いが見て取れます】【しかしまだ肉体改造の効果かは分かりません】【マルティナさんが元から敏感な可能性もあります】

「あなたたちっ……♥♥ 好き勝手♥♥ 言わないで、くれる……♥♥ こんな、なんとも」
ぐりいっ♥

「やあんっ♥ そこはダメよおっ♥」

「いきなりっ♥ は、離せええ♥」

「んんんっ♥♥ あ♥♥ やめ♥♥ 乳首はっ♥♥」

びいいんっ♥

「あはああああああああああああっ♥♥♥」

【絶頂しました】【一度目の絶頂、確認】【あと九回です】

胸を責めていた手が、乳首を摘まむ。お色気コンビも性感帯への刺激に反応しているが、性感のスイッチが入ったマルティナはそれ以上。

雑な愛撫にも異様な高揚を感じ、早々に達してしまってた。

淡々とした確認に神経を逆撫でされ、半ば強制的に絶頂させられた怒りをぶつける。

「もういいでしょうっ♥♥ こんに悪ふざけしないで、早くこれを」

【このペースだと時間かかりますね】【速度を上げてみましょう】

もみもみもみもみっ♥ びんっ♥ びんびんびんびんっ♥

「んあああああああああああ♥♥♥」

【絶頂しました】【二度目の絶頂、確認】【あと八回です】

しかし反抗の意を見せた途端、魔導師たちの眼付きが変わる。

ペースを上げるためと称し、指の動きを加速させ……絶頂の余韻が醒めない乳首では耐えきれず、早くも二度目の絶頂に至る。

（こ、こんなに感じやすくなってるなんて♥ このままじゃ、本当にすぐ十回……♥）

十回絶頂させる、という魔導師の言葉が現実味を帯びてくる。震えるマルティナだが、お色気コンビも乳首責めで徐々に高揚してきたようだ。

「はああん♥♥」

「お♥♥ ふほおっ♥♥」

【おっとここでビビアンとサイデリアが興奮。追い付いたか——】

もみっ♥ くりいっ♥

「またっ♥♥♥ んんんっんうううううううううううううううううう♥♥♥」

【しかしマルティナ、ここでまた引き離れた】【絶頂しました】【三度目の絶頂、確認】【あと七回です】

二人も感じていると思えば、自分だけがまた絶頂。しかし今回は一度だけでは終わらない。

「イッつく う め う め う め う め う め う め う め う め う め う め う め う ♡♡♡」

【と、ここで限界に達したマルティナ】【絶頂しました】【七度目の……】

びんっ♥ びいんっ♥♥ ギゅりいっ♥♥

「あ——♥♥♥ あ——♥♥♥ 止まらないっ♥♥♥ 止まらないいい♥♥♥」

くりくりくりくりくりっ♥♥ ギゅちいっ♥♥ びちいいんっ♥♥

「ツックううおおおおおおおおおおおおお♥♥♥」

【いえ、ここで連続です】【絶頂しました】【八度目の絶頂、確認】【あと二回です】

乳首を潰さんばかりの責め。

乱暴なはずの指使いだが……スイッチが入り、更に六度も達して乳首が火照りきったマルティナにはこの責めすら心地よいものになる。

乳首が叩かれ、弾かれ、爪の先が食い込む痛みすら快楽に変換され、再び連続絶頂。しかも快楽の波が止まらず、更なる絶頂も目の前に迫っている。

「イクイクイクイクイクイクイク……♥♥♥」

「マルティナちゃんっ♥♥ ああんっ♥♥ もうビビアンちゃんも限界よおん♥♥」

「耐えろマルティナ♥♥ あ♥♥ 糞っ♥♥ こんな変態共にいっ♥♥」

くりっ♥ びんっ♥ くりくりくりくりくりくりっ♥♥

「もうっ♥♥ イクッ♥♥ イッちゃううん♥♥♥」

「おっふっっ♥♥ 見るな♥♥ 見るな♥♥ 見る……っっ♥♥♥」

「イグッ♥♥♥ イックうううううううううううううううううううううう♥♥♥」

もみもみもみもみもみもみいいっ♥♥ びいんっ♥♥ ギゅりいいっ♥♥

「あはああああああああん♥♥♥」

「っお♥♥♥ くふっほおおお♥♥♥」

「イックッ♥♥♥ またイグ♥♥♥ おっぱいイグ♥♥♥ 乳首っイグううっ♥♥♥

おっぱい最高ほおおおおおおお♥♥♥」

【連続ですね】【絶頂しました】【十度目の絶頂、確認】【目標達成です】

【ビビアン、絶頂しました】【サイデリア、絶頂しました】

目標の十絶頂に到達し、魔導師たちが顔を合わせて相談する。

しばらく話し合った後……お色気コンビを引き下がらせ、マルティナのみに報告される。

「も♥♥ もう♥♥ 気は済んだでしょうっ♥♥ いい加減、早く解放しなさいっ♥♥」

【目標通り、通常の女性と比較し十倍の絶頂に至ることができました。しかし、今の実験は誤りでした】

【『オトコの十倍』を証明するのだから女性と比較しても意味がありませんでした。申し訳ない】

「……は？ 散々イカしといて、申し訳ない、じゃ……」

【というわけで次は男性との比較です】

「ないっ?!」

マルティナを愛撫していた魔導師が衣服を脱ぐ。無機質な表情ながら、そこには見事な勃起がそそり立ってい

た。

【男性が一度絶頂する前に、マルティナさんが十度絶頂すれば実験は成功です。我々の仮説が正しかったと証明されます】

「ウソ、でしょ、ちょっとっ?! 待ちなさい、それはダメよっ!」

【では、実験……】

意思など構うことなく魔導師が後ろからマルティナのホットパンツのチャックを下ろし、ショーツもズラして秘部に狙いを定める。

マルティナは強く拒否するも、十度の絶頂でその秘裂はしとどに濡れそぼっており、容易に姦通を許してしまうだろう。

挿入を逃れようと尻を左右にぶるんっ♥ たぷんっ♥ と振りとくり、それが皮肉にも雄の本能を興奮させ――

「こんな下らない研究のためなんかに――」

【開始】

ずぽおおおっ♥♥

「んおおおおおおおおおおお♥♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で!